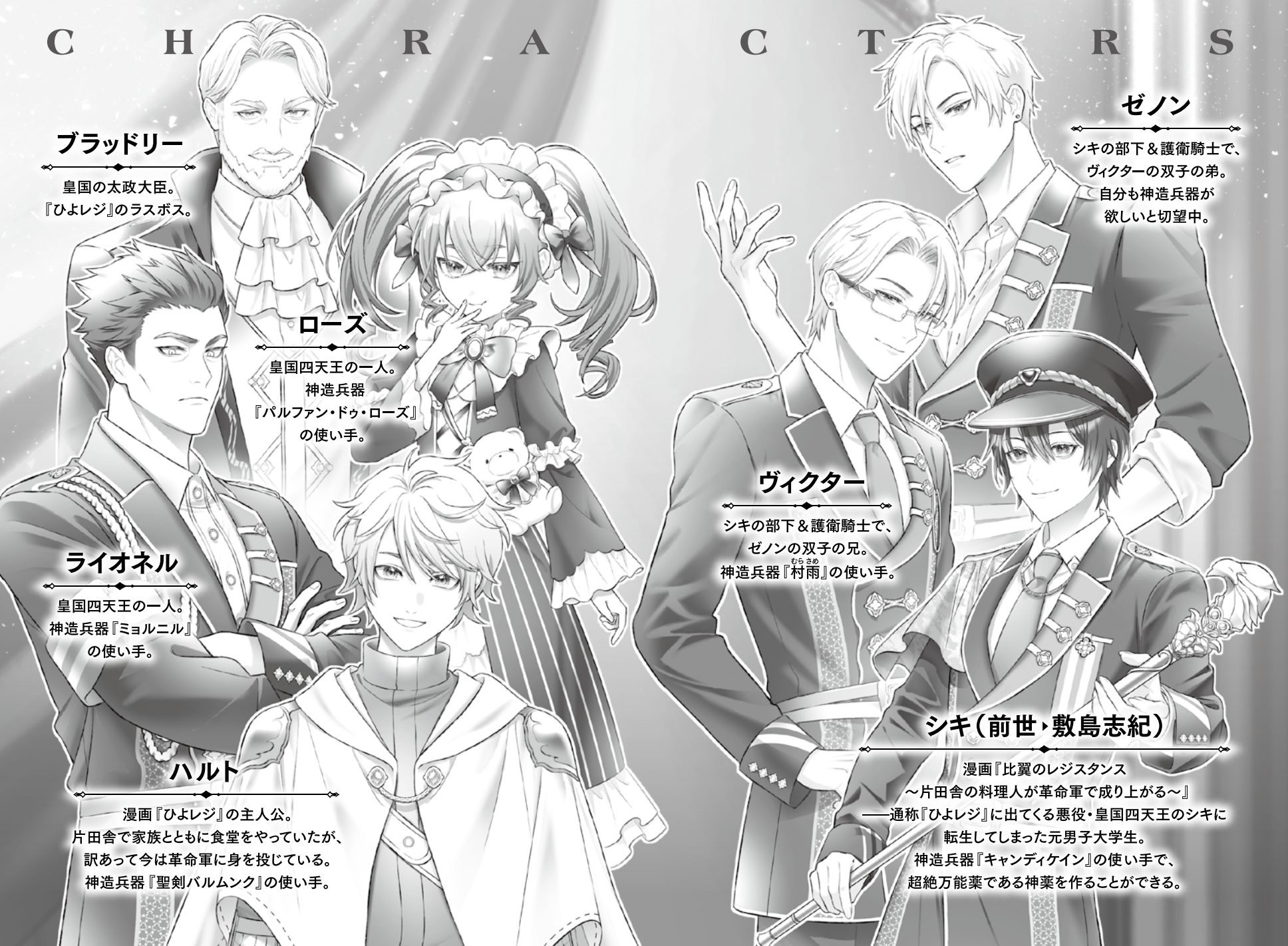
四天王に転生したら部下の双子に想像以上に執着されてるんだけど2

CHARACTERS



ブラッドリー

皇国の太政大臣。
『ひよレジ』のラスボス。

ローズ

皇国四天王の一人。
神造兵器
『パルファン・ドゥ・ローズ』
の使い手。

ライオネル

皇国四天王の一人。
神造兵器『ミョルニル』
の使い手。

ハルト

漫画『ひよレジ』の主人公。
片田舎で家族とともに食堂をやっていたが、
訳あって今は革命軍に身を投じている。
神造兵器『聖剣バルムンク』の使い手。

ゼノン

シキの部下＆護衛騎士で、
ヴィクターの双子の弟。
自分も神造兵器が
欲しいと切望中。

ヴィクター

シキの部下＆護衛騎士で、
ゼノンの双子の兄。
神造兵器『村雨（むらさめ）』の使い手。

シキ（前世・敷島志紀）

漫画『比翼のレジスタンス
～片田舎の料理人が革命軍で成り上がる～』
――通称『ひよレジ』に出てくる悪役・皇国四天王のシキに
転生してしまった元男子大学生。
神造兵器『キャンディケイン』の使い手で、
超絶万能薬である神薬を作ることができる。

おれの名前はシキ。

フルネームは、シキ・フォン・フォートリエ。なんとも舌を噛みそうな長ったらしい名前だ。

職業は、皇国の侯爵家の当主である。

ある日、おれは敵の襲撃にあい、頭をひどく打ちつけた。

それを機に、前世――日本で敷島志紀（しきしましき）という名の大学生だったころの記憶を思い出した。そして同時に、シキ・フォン・フォートリエとしての人生の記憶を、部分的に失ってしまったのだ。

さらに前世の記憶が戻ったことで、ここがかつて読んでいた漫画『比翼（ひよく）のレジスタンス　～片田舎（かたいなか）の料理人が革命軍で成り上がる～』、通称『ひよレジ』の世界だということに気づいた。

それだけならまだよかったのだが、なんと、おれは『ひよレジ』に登場する悪役――皇国四天王の一人である〝神薬（しんやく）の担（にな）い手（て）シキ〟として転生していたのだった……！

漫画の中でのシキの末路は、まあひどいものだった。

主人公が所属する革命軍に捕らえられ、喉と両目を潰され、両足と左手を切り落とされた状態で死ぬまで地下に幽閉される……という救いのない最期を迎えるのだ。

そんな運命を辿るのは絶対にごめんだ。おれは、自分が『ひよレジ』の世界にいることを理解すると同時に、原作の戦いや革命に巻き込まれる前に皇国を脱出しようと決意した。

……最初こそ「原作の展開をもっといい方向に変えられるんじゃないか」なんて、ちらりと考えもしたけれど。

そんな大それたことは、おれなんかには無理だとすぐに悟った。

だから今の目標はただ一つ――『皇国からの穏便な国外脱出』だ。

この世界に来てから一か月が経ったけれど、それは今も変わっていない。

とはいえ、シキとしての記憶をかなり失っているおれの中身は、平凡な日本人の学生だ。

案の定、すぐにボロを出してしまい、『ひよレジ』のラスボス――ブラッドリー大臣に、国外脱出を企てていることがバレかけた。

その時、おれを救ってくれたのが――部下のヴィクターとゼノンだった。

二人は貴族の家に生まれた双子の兄弟で、幼いころに実の親兄弟に裏切られ、奴隷商に売られてしまった過去を持つ。

そこを救ったのが、ほかならぬ〝シキ〟だったらしい。

だからこそ、彼らは今でもおれに仕えてくれているし、国外脱出の計画にも協力してくれている。

しかも二人は、おれが国外脱出したあとも護衛としてついていく、とまで言ってくれたのだ。

……こう言うと、忠義に篤い従者のように聞こえるから不思議だよな。

本当にそうなら、まさに美談だ。

だが残念ながら、おれことシキに、そんな人徳はなかった。

双子はおれの国外脱出に協力する代わりに、とんでもない条件を突きつけてきたのである。

それが――

「お、おい、ヴィクター、ゼノン!?　いきなりなにを……っ、ぁ!?」

「ふふ、今回の調査任務における報酬をシキ様に支払っていただこうかと思いまして」

「俺ら頑張ってやり遂げてきたんだからよ。部下を労ってくれよ、シキ様」

「お、お前たち、ちょっと待って、今はまだ昼間で、んっ、ぅッ!?」

執務室のデスクで書類仕事に追われていたところ、突然、ヴィクターとゼノンが部屋に入ってきた。

そして、何事かと思う間もなく、強引に腕を掴まれて立ち上がらされ、そのまま服を脱がされる。

忠実な部下どころか、これはもう追い剥ぎの所業じゃないか!?

いや、むしろ追い剥ぎのほうがまだよかったかもしれない。

なにせ、あっという間に服を脱がされたおれは、今度はヴィクターに噛みつくようにキスをされたのだから。

「ん、ふっ……ぅ」

ぬるりと舌が唇の隙間から割り入ってくる。

その間にも、ヴィクターの手はおれのあらわになった胸や腹の上を這い、いやらしい手つきで敏感な箇所をさわさわと撫でてきた。

くすぐったいような、ぞわぞわするような感覚に、思わず身体をふるりと震わせる。
「ふふ、シキ様は相変わらず慣れませんねぇ」
「っ、ぅ、うるさい……！」
「そういえば、シキ様を初めて犯したのもここだったよな」
「……っ！」
ゼノンがからかうように告げた言葉に、一気に顔が熱くなる。そんなおれの反応に、ますます双子の笑みが深くなった。
「あの時と比べたら、シキ様はずいぶんといやらしい身体になりましたねぇ。ほら、ここもすっかりやわらかくなって……」
服を半分脱がされたまま、執務机の前に立たされる。上着は剥ぎ取られ、シャツは前がはだけ、ズボンは下着ごと足元にずり落とされていた。
そしてヴィクターの腕が股下をくぐり抜け、会陰のあたりをくすぐるように、すりすりと指先でなぞってくる。足の間を通った腕のせいで、足を閉じることもできない。
おれは顔を真っ赤にしながら、ヴィクターの肩を掴んだ。そうでもしなければ、情けない声を上げて床に崩れ落ちてしまいそうだった。
「っ、ヴィクター、そこやだっ……ひぅっ、ぁ、あっ⁉」
「やだ、じゃないでしょう。国外脱出に協力する代わりに、シキ様は私たちのものになったんですから。むしろ自分から足を開いて私たちを誘うくらいしたらどうです？」

「そ、そんなこと……ぁ、あッ、あっ⁉」
そう——ヴィクターの言うとおり、おれはこの双子と、とんでもない契約を交わしてしまった。
彼らは、おれの国外脱出に協力する代わりに、なんと、おれに「自分たちのものになること」を要求してきたのだ。
もっとはっきり言えば、おれの身体を、ということだ。
本当なら、そんな条件は即座に突っぱねたかった。
けれど……残念ながら、おれ一人では国外脱出はできない。
シキは、『ひよレジ』の中でも重要なネームドキャラクターではあるけれど、戦闘能力はない。
その代わり、〝神薬〟と呼ばれる超強力な回復薬を生み出す神造兵器——キャンディケインを持っているのだ。
このまま原作どおりに展開が進めば、おれに待ち受けているのは身の破滅だ。
原作の最終巻で悪役シキは、死んだほうがマシな目にあいながら、生かされ続ける。
それだけは、なんとしても避けたい！
だからおれは決めた。
主人公ハルトが革命を起こす前に——必ず皇国から脱出するのだ！
幸い、おれの部下であるヴィクターとゼノンは、原作でもトップクラスの戦闘力を誇る。
何度も主人公の前に強敵として立ちはだかり、『ひよレジ』ファンの間でも人気の高い存在だった。

そんな二人が、国外脱出計画に協力してくれるというのだから、これ以上ない好条件だ。
……だからこそ、おれは双子の要求に、泣く泣く応じるしかなかったのだが――
「シキ様、兄貴ばっかりかまってないで俺とも遊んでくれよ」
「ぁっ!?　ゼ、ゼノン……っ、そこ、今触るなっ……ぁ、ひあッ！」
いつの間にか、ゼノンが背後に回っていた。彼はおれの脇の下から腕を通して、胸の上で尖る乳首に触れてきた。
爪先で先端をカリカリと引っ掻かれる。しかもゼノンは、同時におれの耳元へと唇を寄せ、耳を舐め始めた。くちゅり、といういやらしい水音が鼓膜に響き、背筋がぞくぞくする。
「ひっ、ぁ、あッ……！」
思わず首を傾けてゼノンの舌先から逃れようとすると、そんなおれを叱るように、乳首をピンッと強く弾かれた。
「ゃ、あっ!?　やだ、ゼノンっ、それ嫌だって……ぅ、あっ」
「嫌じゃねーだろ？　シキ様のここ、めっちゃぷりぷりになってきたぜ。それに、こっちももう勃ってきてるじゃん」
ゼノンの指摘どおり、おれの陰茎は一度も触られていないのに、すっかり頭をもたげていた。恥ずかしさに、かっと頬が熱くなる。
しかし、そんなおれを見て、向かいにいるヴィクターは面白くなさそうな表情になる。
「シキ様、ゼノンに乳首をいじめられるのがそんなにいいんですか？　これは私も負けてられませんね……」
会陰をいじめて遊んでいたヴィクターが、その腕を今度はおれの腰に回した。なにをするのかと思えば、一方の手でぐにぃっと尻たぶを鷲掴みにし、反対の手でぬちぬちと後孔の縁を弄り始めたのだ。
「ひゃっ!?　ぁっ、ヴィクター、ゼノンっ！　せ、せめて、ここじゃなくて寝室に行かせ……っ、ひっ、あっ、ぁあッ！」
「残念ですが、その頼みは聞けませんねぇ。ベッドの上で乱れるあなたを見るのもいいものですが、こちらのほうがより恥ずかしがっているあなたを堪能できますし」
「そうそう。たまには味変しねぇと、シキ様だってつまんねーだろ？」
「なんだそれは!?　そ、そういうのはいらないっ、あっ、やだ、だからヴィクター、だめだって……っ、んっ、んぁ、あッ！」
ちゅぷっ、という水音とともに後孔の中にヴィクターの人差し指が入ってきた。いつの間にか手に潤滑油をまとわせていたらしく、その指は肉壁を掻き分けてぐぷぐぷと奥へと進んでいく。
「ひっ、ぅっ、あっ……！」
「相変わらず、シキ様の中はすごく熱いですね」
ヴィクターが唇を弧の形に歪めながら、後孔に埋めた指をぬちぬちと動かす。彼の指が肉壁を掻き分けて、とうとうくるみ大のしこりの上で止まった。
そこは今まで何度も二人から快楽で責め立てられた場所だ。前立腺という名の弱点の上に置かれ

たヴィクターの指が、おれを焦らすように、くるくると円を描く。
「っ、うっ……！」
「ふふ、この程度の刺激では物足りませんか？」
「だ、誰が……、ひあァっ!?」
ヴィクターに言い返そうとした瞬間、ゼノンがいきなりおれの乳首を指でつまんで上にくんっと引っ張った。
その刺激に思わず身体に力が入り、後孔の中に埋められたヴィクターの指をきゅううううっと締めつけてしまう。
「これはこれは、すごい締めつけですね」
「いっ!?　ぁ、それやだ、ゼノンっ……ぁ、あッ!?」
「やだ、じゃないだろ？　二点同時に責められるの、シキ様大好きだもんな～」
「す、すきじゃないっ、ぁっ、やだっ、だめっ、ひっ、ああッ！」
ゼノンの指が乳頭のくぼみを指先でかりかりと引っ掻いてくる。
同時に、ヴィクターがおれの中に埋める指を二本に増やし、腹側にあるしこりを指先でぐりぐりと擦ってきた。同時に与えられる刺激に、快楽が電流のように身体を突き抜ける。
「ぁっ、あぁッ!?　ヴィ、ヴィクター、ゼノンっ、たのむから、少し待っ……！」
「待つわけがないでしょう、こんな愉しいこと。ねえ、ゼノン？」
「まったくだぜ。むしろ、こっちは朝からあんたを襲いたいのを我慢してたくらいだ」

「いっ!?」
ゼノンが両手の指でそれぞれ乳首をつまんだ。そのまま指の腹をすりあわせるようにして、硬くしこりを持ち始めた突起をぐにぐにとすり潰す。しかもまったく同じタイミングで、ヴィクターの指が前立腺をぐちゅりと押し潰した。
「～～～ッ……！」
瞬間、神経が焼ききれそうなほどの快感が身体を突き抜けた。視界が真っ白になる。たまらず、喉をのけぞらせて、身体をがくがくと震わせた。
身体がバラバラになりそうなほどの強い快感だった。なのに、それでもなお、二人の責めは緩まない。
「ひ、あっ、ぁ、だめっ、おれ、いまイった、イってるからっ……！　ぁっ、あっ、ひぁっ！」
「シキ様。今日最初のメスイキですね、おめでとうございます」
「うわ、腰の震え具合やべぇな。早く突っ込みてぇ～」
「あっ、やだ、またイく、いく、やっ、あっ、ぁああッ！」
おれが絶頂を迎えたことはわかっているはずなのに、二人は愉しそうに笑みを交わしながら愛撫を続ける。
いや、もはや愛撫なんて生易しいものじゃない。おれはたまらず、涙目になりながら正面にいるヴィクターにすがりついた。
「ヴィクターっ、す、少し休ませ……ひぁっ!?」

ヴィクターの腕にすがった直後、後孔に挿入された指が増えたのだ。だが、それはヴィクターの指ではなかった。

「だからさぁ、兄貴ばっかりかまうなって言ってるだろ？」

ゼノンがおれの耳元で、不機嫌そうに囁いた。

いつの間にか、彼の指が後孔に挿入されていた。まだヴィクターの指もそこに入ったままだというのに。

そんな弟の行動に、ヴィクターもさすがに驚いたように眉を上げた。

「おや、ゼノン。まだ私は抜いていませんよ？」

「ぜ、ゼノンっ、今すぐ抜けっ……ぁ、あぁっ!?」

「だってよー、シキ様が兄貴ばっかりかまうからよ」

「ぁっ、やだっ、ゼノンっ、動かすな……ぁ、ああッ!?」

後孔の中で、ゼノンの指がくちゅくちゅと動き始めた。しかもその動きに呼応するように、ヴィクターの指もゆっくりと動き始める。

「ヴィ、ヴィクターっ、ゼノンっ、せ、せめてどっちか抜いっ……ひぁ、ァ、あっ!?」

「ふふ、じゃあシキ様が選んでください。選ばれなかったほうが抜くということで」

「おっ！　どっちの指テクがいいか、ってことだな」

「そ、そんなの選べるわけ……っ、ぁ、ぁあッ!?」

ヴィクターが前立腺をつんつんと指の腹で突いたかと思えば、ゼノンが対抗するように、前立腺

を爪先でグリグリと押し潰す。

ゼノンがゆっくりと指を前後に動かしたかと思えば、ヴィクターが二本の指を大きく開いて後孔を広げる。

「〜〜〜〜ッ!?」

思わずつま先立ちになるも、そんな些細な動きで逃げられるわけもない。

肉壁の中でてんでばらばらに動く三本の指に、おれは耐えきれず、腰をガクガクと震わせて本日二度目の絶頂を迎えた。

あまりにも早い絶頂は、双子でさえも予想外だったらしい。ヴィクターとゼノンは目を見開いて驚いていたが、すぐに愉しそうな笑みへと表情を変えた。

「これはまたずいぶんとお早い……ふふっ、シキ様はすっかりメスイキが癖になりましたねぇ」

「っ、ぁ……ぁ、ぅ……」

「はは、もう喋るのも辛そうだな〜」

ふと下を見ると、おれの着ていたズボンや高そうな絨毯の上に、体液の飛沫が飛び散っていた。衣服は最悪捨てればいいが、絨毯はそうもいかない。

明日からこの場で再び執務に励まなければいけないのかと思うと、それだけで顔が熱くなる。

「ふっ……はっ……ぅっ……」

後孔からゆっくりと二人の指が抜かれる。指先がちゅぷり、と水音を立てて完全に引き抜かれた瞬間、おれはもう立っていることができず、がくりと崩れ落ちた。

力が抜けたおれを、ゼノンが腕の中へ抱きとめた。そして、まるで獲物を仕留めた猛獣のように満足げに微笑む。

「ははっ、俺の腕に飛び込まずにいられないほど気持ちよかったか？」

「調子に乗らないように。シキ様は、ただ一時的に力が抜けているだけですよ」

ゼノンの不機嫌が収まったかと思うと、今度はヴィクターが顔をしかめて不機嫌そうになる。

なんだ？　今日の二人の表情筋は、反比例の法則でもあるの？

そんなことを考えていたら、ゼノンがひょいとおれの身体を抱き上げた。目を白黒させていると、今度は執務机の前のソファに下ろされる。

あ、ソファで休ませてくれるのかな？

でも、どうせなら寝室のベッドに連れていってほしいところなんだけど。

もう今日は仕事もやる気にならないし……

「よしっ。じゃあもう充分ほぐしたし、そろそろヤるか」

「はっ!?」

予想外のゼノンの宣言に、めちゃくちゃでかい声が出てしまった。

いや、でも今の言葉、聞き捨てならないんだけれど!?

「も、もう今日はこれで終わりじゃないのか……!?」

「はぁ、そんなわけねーだろ？　あんたは何度もイきまくって気持ちよくなっただろうけどよ、俺と兄貴はまだなにもヤってねぇし」

「そ、それはおれの意思じゃない！」

「私も聞き捨てなりませんね、ゼノン」

意外なことにヴィクターからも反論が飛んできた。

おれは期待を込めてヴィクターへ視線を向ける。

「なぜあなたがシキ様を抱くつもりでいるんです。ここは私に譲るべきでしょう？　だいたい、シキ様はどう見ても私の愛撫のほうを悦んでいたではありませんか」

「お前もなにを言ってるんだ、ヴィクター!?」

こいつも敵だった！

いや、でもそれは今に始まったことじゃないか。

「えー、いいじゃねぇか。さっきは兄貴が美味しいところを持っていっただろ？」

「それとこれとは話が別です。それを言うなら、あなただって朝はシキ様に……」

かと思えば、二人はおれを放って言い合いを始めた。

この隙に逃げられないかなーと思い、おれはそろ～っとソファから下りようとする。しかし、直後、双子がそろっておれに顔を向けた。

あっ、なんかものすごく嫌な予感……！

「シキ様……今、一人で逃げようとしませんでした？」

「俺らが言い争ってる隙に、逃げようとしてたよな？」

「い、いや、そんなことはない。ちょっと水でも飲もうかなと思っただけだ」

冷や汗をだらだらと流しながら必死に否定する。しかし、二人に身体を捕らえられて、再びソファの上に戻されてしまった。
「やれやれ。少し私たちは手加減しすぎたようですねぇ、ゼノン」
「そうみたいだな、兄貴。こりゃたっぷり身体に思い知らせてやらねーと」
先ほどの反目し合っていた様子から一転、息ぴったりになったヴィクターとゼノン。
あっ、これやばいやつだ。
「ちょっ、ま、待て待てお前たち！　少し話し合わないか!?」
恐怖のあまり、喉から引きつった声が漏れる。
しかし、二人は唇を弧の形にして微笑んだ。
「そうですね。では、お互いの誤解を解くためにこれからたっぷりと話し合いをしましょうか」
「シキ様は身体に聞いたほうが、素直にお返事してくれるみたいだからな」
「〜〜っ！」
そう告げた二人の笑みはとても麗しかったが——おれには悪魔の笑顔にしか見えなかった。

1

「はぁ……」
「シキ様、ため息なんてついてどうしました？」
「ずいぶんと疲れてるみたいだな」
「……誰のせいだと思ってるんだ、お前たち……」
おれは双子をじと目で睨んだ。
昨日のことを思い出すだけで頭が痛い。
結局あのあと、執務室で双子と二時間近くもセックスしてしまい、仕事にならなかったのだ。
しかも、行為によって、腰や内腿に筋肉痛が残っている。その上、身体中キスマークだらけだし、愛撫をされすぎた胸の先の……その、乳首もなんか赤くなったままで全然腫れがおさまらないし……
最近、シャツに胸がすれると、なんかむずがゆいというか、変な気持ちになるんだよな……前は全然こんなことなかったのに。
なんだかこのままいくと、本当に取り返しがつかないことになりそうで怖い。
なのに、おれの身体をこんな風にした当の二人は、何食わぬ顔をしている。それがちょっと悔

しい。

さて、そんなおれたち三人だが、今日は珍しく皇城の外に出ている。

貴族街の中心部にある巨大闘技場へ向かう馬車に乗っているのだ。

皇都にある闘技場は、直径二五〇メートル、高さ六五メートル。収容可能人数は約八万人。観客席は四階建てで、地下には牢や収容所、管理者の居住区まで備える巨大施設である。

先代皇帝の時代まで、この闘技場は、皇国軍兵士たちの模擬戦や競技大会、市民による歌謡祭などが開催される、華やかな催しの場だった。

だが今の皇帝陛下――というより、実質的に皇国を牛耳っているブラッドリー大臣が摂政となってからは、闘技場の催しはがらりと変わってしまった。

今、ここでおこなわれているのは、もっぱら剣闘士たちの殺し合いだ。

税を払えず奴隷に身を落とした者。

貧しさゆえに家族に売られた者。

あるいは運悪く人攫いに捕まってしまった者たち。

そうした奴隷のうち、買い手が見つからなかった者は、二束三文でこの闘技場に売り払われ、剣闘士として戦わされる。

また、奴隷だけではなく、犯罪者もここへ送られる。

おれが以前、辺境で出会った山賊たちも、もし皇国軍に捕まっていれば、闘技場で死ぬまで戦わされていたことだろう。あるいは鉱山での過酷な労働に従事させられていたか。もちろん裁判なんて、はじめからなしだ。

闘技場に送られた者たちは、奴隷も犯罪者も、死ぬまで剣闘士として戦い続けるしかない。

剣闘士同士で殺し合いをさせられることもあれば、魔獣と戦わされることもある。

……さて。

そんな血なまぐさい闘技場に、どうしておれが向かっているのかというと――これも四天王シキとしてのお勤めだからだ。

というのも、ブラッドリー大臣から闘技場観覧の招待状が届いてしまったのだ。しかも今回は、大臣だけでなく、皇帝陛下やおれと同じ皇国四天王のローズまで集まるという。

そんな名だたるメンバーがそろう中、おれだけが欠席するわけにもいかないと思い、渋々ながらこうして馬車に揺られている……というわけである。

なお、闘技場には皇族専用の観覧席が設けられていて、その席は一般の観覧席からは見えないように工夫されている。そのため、市民たちに顔を見られる心配はないらしい。

まあ、そうじゃなかったら、皇帝が来ているだけで市民たちが大騒ぎになっちゃうもんな。

……はぁ。それにしても、憂鬱だ……

みんな、なにが楽しくて殺し合いなんか見に行くんだろう？

おれにはさっぱりわからない。

「お、そろそろ見えてきたな！」

「そうですね、今日は晴れていてよかったです」

げんなりしているおれとは対照的に、双子は声を弾ませている。
こうやって楽しそうにしていると、二人とも年相応の若者に見えるな。少なくとも、これから闘技場に殺し合いを見に行くとは思えない。
「楽しそうだな、お前たち。闘技場が好きなのか？」
二人はそろって頷いた。
「ええ、好きですよ。身の程を弁えない弱者は嫌いですが、生に必死になってもがく姿には見応えがあります」
「それに、俺らの思い出の場所だしな！」
「思い出の場所？」
双子にとって、闘技場ってそんなに思い入れがある場所だったっけ？
首を傾げていると、ヴィクターが説明をしてくれた。
「かつて私とゼノンを奴隷商に売り払ったクズと、その奴隷商の一味のことを覚えていますか？シキ様に捕らえられたあと、彼らはここに送られたんですよ」
「そうそう、あいつらが闘技場で殺された日は最高だったよな！」
にこにこと笑顔で頷き合う双子。
その言葉におれはなるほど、と内心で頷いた。
そうか、この二人は家族によって違法奴隷商に売られたところを、シキに助けられたんだったな。
それがきっかけでシキに仕えるようになったんだ。

……って、ちょっと待って。
今、二人は『私とゼノンを奴隷商に売り払ったクズ』、『あいつらが闘技場で殺された日は最高だった』って言ったよな？
確かヴィクターとゼノンを奴隷商に売り払うように親に提案したのは、彼らの実の兄だったはず。
ということは――
「え……？　お、お前たち、自分の兄が殺されるところをわざわざ闘技場に見に行ったのか？」
「当たり前だろ？　俺らが見に行かないで誰が見るんだよ。それに、あんな男は家族でもなんでもねぇ、俺の兄貴は一人だけだ」
「ええ、私にとっても兄弟と呼べる人間はゼノン一人だけです。あの男が剣闘士として殺された日は、ゼノンと二人で祝杯をあげましたよ」
「そ、そうか……まあ、お前たちがそれでいいなら……」
嬉しそうに語る双子に、なんと言えばいいのかわからなくなる。しかし、引き気味のおれに対して、双子は終始楽しそうな様子だ。
ま、まぁ、実の兄とはいえ、この双子を借金のかたに奴隷商人に売り払った元凶だもんな……家族と思えなくなるのも当然か。
なにせこの二人、貴族の出身だが家名を捨てているのだ。
本来ならば彼らの親や兄が死んだあと、家名を継ぐこともできたのだが……当時の二人はそれを拒否したらしい。そのためゼノンとヴィクターには、平民と同じように苗字がない。

自分たちを裏切った家族に対する恨みや怒りが、それほど深かったということだろう。
奴隷商での二人の扱いは、かなりひどかったみたいだしなぁ……
「――お、着いたみてぇだな！」
ゼノンがそう言った直後、馬車のスピードが緩まり、やがて大きくガタンと揺れて停まった。
さっそく降りようと腰を浮かせたところで、ヴィクターに腕を取られて引き留められる。
どうしたのかと思えば、ゼノンが先に馬車を降りた。
彼は周囲を見回し、安全を確認する。そして馬車に向かって「兄貴、大丈夫だぜ」と声をかけてきた。
どうやら、おれが外に出る前に、不審な者がいないか確かめてくれたらしい。
とはいえ、ここは皇族専用観覧席の入口だ。
一般人が近づけないよう、周囲には何人もの衛兵が立っている。そこまで念を入れずとも大丈夫なんじゃないかなぁと考えていたら、どうやらその気持ちが顔に出ていたらしい。
ヴィクターが、こちらを見て口を開いた。
「近頃は革命軍の動きも活発化していますからね。それに、最近のシキ様は無茶をしますから」
「……そんなことはないと思うが」
そう答えつつも、目が泳いでしまう。
た、確かに、無謀な真似は何度かしたけれど、おれだって考えなしに動いたわけじゃないし！
ただ、行動に結果が見合わなかっただけだから……！

そんな会話をしながら、おれたち三人は馬車を降り、専用通路を通って闘技場へと向かった。
薄暗い、しかし広々とした通路を抜けると、やがて皇族専用の観覧席に辿り着く。そこにも、護衛の衛兵が二人立っていた。
おれは彼らを一瞥もせず、当然といった風を装いながら、無言で扉が開かれるのを待つ。……が、内心ではちょっとドキドキしていた。
本当は、衛兵さんたちに「いつもありがとうございます！」くらい言いたいんだけれど、シキはそんなことを言う性格じゃないからなぁ。
そうして開かれた扉の先――
おれは後ろにゼノンとヴィクターを従えて、堂々とした足取りで観覧席へ入った。
観覧席は広々としていて、天井には豪奢なシャンデリアが吊るされ、壁には繊細な刺繍が施された厚手のカーテンが下がっている。
舞台に面したテラスには、座り心地のよさそうなソファが間隔をあけていくつも配置され、一つ一つにふかふかのクッションが置かれていた。
テーブルには銀製のポットに入った温かい飲み物や、美しく盛り付けられた軽食、色とりどりの果物や焼き菓子が用意されている。
もはや観覧席というよりも、ホテルのラウンジや応接間といった雰囲気だ。
血なまぐさい闘技場の喧噪とはまるで別世界。
そしてそこには、すでに四人の人影があった。

「おお、シキ将軍！　てっきり今日は来られないかと思っていましたよ」
最初におれに声をかけてきたのは、革命軍の仇敵にして、この物語におけるラスボス――ブラッドリー大臣だった。
にこやかな笑みを浮かべ、両手を広げておれを出迎える様子は、一見するとただの愛想のいいおじさんそのものだ。
しかし、その実態は幼い皇帝を傀儡にして、皇国の実権を掌握する狡猾で危険な男である。
「やっほー、シキちゃん。闘技場に来るなんて珍しいね～？」
次におれに声をかけてきたのは、ローズだった。
彼女もおれと同じく、皇国に四人しかいない大将軍――四天王の一人であり、神造兵器持ちだ。
ツインテールに結んだ鮮やかなピンクの髪と、フリルだらけの黒いゴスロリドレス、そして、大事そうに抱えたテディベアのぬいぐるみ――まるで人形のように可憐な見た目だが、それに騙されてはいけない。
ローズが所有する神造兵器は、『パルファン・ドゥ・ローズ』というペンダント型の香水だ。
そこから放たれる香りを一度でも吸い込んでしまえば、たちまち身体の自由を奪われ、彼女の〝操り人形〟になってしまう。
その能力の厄介さもさることながら、問題は彼女自身の嗜好だ。
ローズはその香水の力を使って、自分の好みに合った女の子を見つけては人形のように操り、時には剥製にして部屋に飾るという背筋の凍るような悪癖を持っているのだ。

「シキ将軍、おはようございます。今日はよい天気ですね」
「め、珍しいものだな……シキ将軍がこのような催しに参加するとは」
最後に声をかけてきたのは、年若い少年少女の二人組だった。
溌溂とした声と、可憐な笑顔を向けてきたのは、リリア・ブラッドリー。
スミレ色の瞳に白磁のような肌、腰まで伸びた銀色の髪が特徴的な美しい少女で、ブラッドリー大臣の妾腹の娘にして、皇帝陛下の婚約者だ。
年齢のわりに落ち着いた佇まいで、清廉な笑みには鋭い知性が垣間見える。
その隣で、おずおずと口を開いたのが皇帝陛下だった。
この皇国で最も大きな権力を持つはずの存在だが、どこか所在なげな表情を浮かべ、落ち着きなく視線を彷徨わせている。
彼はここにいる誰よりも緊張しているようで、びくびくしながらおれの顔色を窺うその様子に、なんだか同情心を掻き立てられてしまった。
リリア嬢と皇帝陛下は同い年のはずだけれど……正直、凛とした雰囲気のリリア嬢のほうが年上に見えちゃうな。
ところで……もしかして、到着したのっておれが一番最後？
っていうか、皇帝陛下より遅く到着してるんだから、どう考えても遅刻だよな!?
しまった、もっと早い時間に出てくればよかった！
こ、こういう場合、なんて言えばいいんだ？

いや、常識的に考えれば謝るのが普通なんだけどさ。でも、シキのキャラ的に素直に謝るような性格じゃないし……！

おれが心の中でわたわたしていると、背後の扉が再び開く音が聞こえた。

反射的にそちらへ顔を向けると、そこには背の高い、美丈夫が立っていた。

がっしりとした体格に、鋭いアイスグレーの瞳。精悍な顔立ちに、短く整えられた緑の髪。年の頃は三十代半ばくらいだろうか。

おれと同じく皇国軍の軍服を身にまとい、巨大なバトルアックスを斜めに背負っている。堂々としたその佇まいには、ただ者ではない風格が漂っていた。

……よ、よかった！　おれより遅く来た奴がいた!!

内心でガッツポーズを決める。

遅刻したのが自分だけじゃないとわかって、心底ほっとした。

しかし、その一方で――彼の顔に、妙な既視感を覚える。

この顔、どこかで見たことがある気がするぞ。

こうして実際に会うのは初めてだけれど……そうだ！

確か、おれと同じ皇国四天王の一人だ！

えーっと、名前は……

「おお、ライオネル将軍！　いつ皇都にお戻りに？」

「昨夜戻りましてございます、ブラッドリー大臣。ちょうど一月ぶりですな」

ああ、そうだ！　思い出した！

この男は、四天王の一人――『雷撃のライオネル』だ！

ちょうど大臣が名前を呼んだことで、記憶が一気に繋がった。

彼の名はライオネル。皇国貴族の出で、神造兵器『ミョルニル』を携える四天王の一人だ。

背中にあるバトルアックスが、それに違いない。使用者の念じた方向へ雷撃を放つことができるという、まさに〝雷撃〟の名にふさわしい能力を持つ兵器だ。

けれど……あれ？　おかしいな。

……ライオネルって、今このタイミングで皇都にいるはずだっけ？

おれの記憶が確かなら、原作だと彼はこの時期、海賊討伐の任務で皇都を離れていたはずだ。

彼が戻ってくるのは、もっとずっとあとだったような……？

「聖剣バルムンクの使い手が、革命軍にあらわれたと知らせを受けましてな。それゆえ、急ぎ皇都へ戻ってまいった次第です。無論、海賊どもの首魁はすでに討ち果たしてございます。残党の掃討は、部下たちの手にゆだねても差し支えないと判断いたしました」

「それはそれは、ご苦労さまです」

ライオネルがここにいる理由はあっさり判明した。

三大神器とうたわれる聖剣バルムンクの使い手があらわれたという知らせを聞き、予定を変更して急ぎ皇都へ戻ってきたらしい。おそらく、それを知らせたのはブラッドリー大臣だろう。

……ちなみに、その「聖剣バルムンクの使い手があらわれた」という情報を大臣に伝えたのは、

他でもないこのおれである。
あれ？
ってことは、つまり――
おれのせいで、ライオネルが予定より早く戻ってきちゃったってこと⁉
ど、どうしよう。これって大丈夫なのか……？
ライオネルが帰ってきたせいで、革命軍の今後に悪い影響が出たりしないよね……？
内心で頭を抱えていると、ライオネルがこちらへ視線を向けてきた。
「シキ将軍……貴殿は相変わらずのようでございますな」
わわっ、どうしよう！　こっちに話しかけてきた⁉
今、おれはそれどころじゃないんだけどな～！
「聞き及んでおりますぞ。先のウルガ族討伐では、もっぱらローズ将軍に働かせて、貴殿は高みの見物であったとか。四天王たる者、たまには前線にて剣を振るわれてはいかがかな？」
ライオネルは皮肉めいた笑みを浮かべ、どこか威圧的な口調でそう言い放った。
……えっ、なに？
この人、おれより遅刻してきたくせに、なんでこんなに偉そうなの？
もしかして、おれ――というか転生以前のシキとライオネルって、あまり仲がよくなかった……
いや、それどころか犬猿の仲だったりしたのか？
確かに、おれは『ひよレジ』の大ファンだったけど、シキとライオネルの関係がどうだったかまでは覚えていない。
原作でも、彼らの絡みはそこまで描かれていなかったし……というか、そもそも原作のシキは人格に難がありすぎて、仲のいい人間なんて一人もいなかったし！
なんと返せばいいのかわからず無言を貫いていると、意外なところから助け舟が入った。
「ほらほら、お二人とも、ここは陛下の御前ですし、お喋りはそのくらいにしておきませんか？　そろそろ催しも始まるようですからねぇ」
「……これは失礼いたしました、ブラッドリー大臣、皇帝陛下」
にこやかな笑みを浮かべた大臣にたしなめられ、ライオネルはあっさり引き下がった。
彼は大臣と皇帝陛下に向かって頭を下げると、さっとこちらに背を向け、一番奥のソファへどさりと腰を下ろす。
おれも大臣と皇帝陛下に向かって軽く目礼をしたあと、双子とともに左奥のソファ席へ向かう。
もちろん、ライオネルから一番遠い場所を選んだ。
おれが腰を下ろすと、ゼノンとヴィクターがその左右に座る。そしてすぐに、二人はヒソヒソ声で話しかけてきた。
「シキ様、大丈夫ですか？　まさかライオネル将軍がこんなに早く戻るとは……」
「あの野郎、前からシキ様に突っかかってくるんだよなぁ。うぜぇったらありゃしねぇ」
「なんというか……おれはずいぶんと嫌われているようだな」
「ライオネル将軍は、出自的にも性格的にも、シキ様とは正反対の方ですから」

ふむふむ。双子の反応から察するに、ライオネルとシキは反目し合う仲というより、向こうが一方的に突っかかってくる間柄だったようだな。

心当たりは嫌というほどある。

原作のシキは、神経質で猜疑心の強い、筋金入りの性格破綻者だった。ヒステリーを起こして部下に八つ当たりをするのも日常茶飯事の最悪上司だったのだ。

あのゼノンとヴィクターが口をそろえてそう評価していたので間違いない。直属の部下にそこまで言われるのだから、同僚から毛嫌いされるのも当然だろう。

「おれは気にしていないから、お前たちも気にするな。それよりも、そろそろ試合が始まるみたいだぞ」

おれがそう言うのとほぼ同時に、司会の声が会場に響き渡った。

ここ、皇族専用の観覧席にも、はっきりとその声が届く。

『――皆様、大変お待たせいたしました！　本日登場いたしますのは、この闘技場で現在十連勝中の剣闘士アダムでございます！』

その瞬間、観客たちが一斉に歓声を上げた。

どうやらアダムという剣闘士は、かなり人気があるようだ。

「すごい熱狂ですね」

「十連勝か、こりゃ見応えがありそうだな」

ヴィクターとゼノンも期待に満ちた顔で、舞台を見つめている。

そして、場内の熱気を背に、ついに剣闘士アダムが入場した。

彼はがっしりとした筋肉質の大男で、身長は軽く二メートルを超えている。

上半身は裸、下半身は簡素な生成りのズボンをはいているだけだ。浅黒い肌には、上半身から頬にかけて幾何学模様のような赤黒い刺青が刻まれている。

顔立ちと肌の色からして、異民族の出身のようだ。

『本日、剣闘士アダムと対戦いたしますのは――魔獣ベアウルフでございます！』

反対側からは、狼型の魔獣があらわれた。

ベアウルフは銀の毛並みを持つ中型魔獣だが、今日の個体は中型とは思えないほどの大きさで、ゆうに体長四メートルを超えていた。

首輪と轡をつけられたベアウルフの太い鎖を引いているのは、黒ずくめの衣装をまとった調教師だ。

調教師は舞台の中央にベアウルフを導くと、首輪と轡を外し、おもむろにその首元に手を伸ばした。

ベアウルフの首元になにかの処置を施しているようだが、ここからでは距離があってよく見えない。

いったいなにをしているんだろう？

不思議に思っていると、ベアウルフの様子が一変した。

今まで大人しかったベアウルフが、突然口の端からよだれをダラダラと垂らし、荒い息を吐きな

がら毛を逆立て始めたのだ。
その様子を見たゼノンが、眉をひそめて舌打ちをする。
「ありゃ、薬でベアウルフを無理やり操ってるな」
「薬……？」
「たぶん、日頃から麻薬みたいなもんを餌に混ぜて与えてるんだよ。薬に依存させちまえば、命令にも逆らわなくなる。さっき首に打ってたのは、麻薬と興奮剤を混ぜたやつだな……もちろん、そんなやり方じゃすぐに壊れちまうけどな」
「ベアウルフは本来、比較的人に馴れやすい魔獣です。時間をかけて調教すれば、きちんと命令に従うようになります。効率を優先したのでしょうが、こういうやり方はいただけませんね」
「まったくだぜ、ここもずいぶんと変わっちまったなぁ。昔はもっと面白い場所だったのによ」
どうやら二人とも、少し興を削がれたようだ。
馬車の中で見せていた楽しげな表情は消え、どこか冷めた目で舞台を見つめている。
『――では、試合開始！』
司会者のかけ声と同時に動いたのは、ベアウルフだった。
対する剣闘士アダムは、無表情のまま微動だにしない。
「グルルルル……！」
ベアウルフが唸り声を上げながらアダムめがけて突進し、鋭い牙をその喉元に突き立てようとする。

しかし、牙が届く寸前に、アダムはすっと上体を沈め、巨体に似合わぬしなやかな動きでベアウルフの攻撃を回避した。
そのまま滑るように右へ回り込んだアダムは、次の瞬間、蛇のように腕を伸ばし、ベアウルフの首へと巻き付けた。
「おっ、締め技かよ!?」
「これは……！」
ゼノンとヴィクターが感嘆の声を上げた。
その間にも、剣闘士アダムの腕はぎりぎりとベアウルフの首を締め上げていく。ベアウルフは必死にもがき、首を大きく横に振って逃れようとするが、アダムの腕はびくともしない。
次第に、ベアウルフは白目を剥いて、身体をガクガクと震わせ始めた。酸欠によるものだろう。
そして、ベアウルフの身体からふっと力が抜けた瞬間――アダムはさらに力を込めた。
ゴキン、という嫌な音が闘技場に大きく響く。
ベアウルフの首の骨が折れた音だった。
場内は水を打ったように静まり返った。
しかしその静けさは長く続かず、すぐに爆発的な歓声が闘技場を揺らす。
『――信じられません！　剣闘士アダム、これで十一連勝達成！　あの凶暴なベアウルフ相手に、一瞬の隙も見せず勝利です！』
司会者も興奮のあまり、我を忘れたように絶叫している。

おれの両隣に座る双子も、この結果には満足したようだ。二人とも楽しげに目を輝かせ、今の試合について話し合っている。
「今の動きは見事でしたね」
「ああ、あのアダムって剣闘士、なかなかやるな！」
「素晴らしい動きだ。おれなんて、目で追うのがやっとだった」
おれは二人に相槌を打ちつつ、大臣たちの反応を横目で窺ってみた。
「……ふむ。面白みに欠ける試合でしたねぇ。私はもっと、剣闘士が無様に命乞いをするような試合が見たいのですが」
「そうそう、ローズ的にもちょっと期待外れだったなぁ～。ていうか、可愛い女の子の剣闘士って出ないのぉ？」
「貴殿はそればかりですな、ローズ将軍」
「ライオネルちゃん、前から言ってるけれど将軍ってつけるのやめてよ。可愛くないじゃん！　ローズちゃんか、せめてローズって呼んで！」
ブラッドリー大臣、ローズ、ライオネルの三人は、いずれもどこか鼻白んだ様子だった。
ライオネルは、ローズの反応にちょっと呆れているようにも見える。
どうやらブラッドリー大臣とローズは、今の試合が物足りなかったようだ。二人の残虐性がよくあらわれている感想だった。
さて、皇帝陛下とリリア嬢の反応はどうだろう。

「あ、あのアダムって剣闘士……すごいなぁ。あんなに大きな魔獣を前にして、ぜ、全然怯えてなかった……」
「そうですわね。しかも武器も持たずに、ベアウルフを倒してしまうなんて……剣闘士にしておくのがもったいないくらいです。ところで陛下、喉は渇いていらっしゃいませんか？　お飲み物をどうぞ」
「あ、ありがとう、リリア。じゃ、じゃあ……貰おうかな」
皇帝陛下はどこかほっとしたような表情を浮かべていた。
どうやら、アダムが無事だったことに安堵しているみたいだ。
対するリリア嬢は、陛下を気遣いながらも、闘技場の上にいるアダムへ値踏みするような視線を向けている。
おそらく、アダムを革命軍に引き込めないか、考えているのだろう。
なにしろ彼女は、大臣の実娘でありながら、密かに革命軍と繋がるスパイでもあるのだ。
こういう抜け目ないところ、お父さん譲りだね！
本人に言ったらガチ切れされると思うから、絶対に言わないけれど。
それにしても、皇帝陛下とリリア嬢の関係はなかなか良好みたいだ。
リリア嬢は皇帝陛下の体調を気遣いつつ、冷たい飲み物やお菓子を色々とすすめている。皇帝陛下を見つめる顔は、慈愛に満ちた優しいものだった。
ただ、その眼差しは婚約者に向けるものというよりは、弟の世話を焼く面倒見のいいお姉ちゃん

という感じ。
ただ……対する皇帝陛下のほうは、違うみたいだ。
先ほどからリリア嬢に話しかけられるたび、頬を赤らめて気恥ずかしそうに視線を逸らしている。
どうやら陛下は、リリア嬢に恋心を抱いているらしい。
いいねいいね、この青春な感じ！
いやあ、大臣たちの会話が物騒すぎるから、年若い二人のやりとりを見ると、心がなごむなぁ。
しかし——なんというか、今まですっかり忘れていたな。
今、魔獣との試合を終えた剣闘士アダム。
彼もまた、『ひよレジ』に登場する重要なキャラクターの一人であり、神造兵器の使い手なのだ。
確か、現時点で彼の左手には『ゴールドレイン』という宝玉が埋め込まれているはずだ。
この宝玉は、適性者に身体強化と超回復の力をもたらす。小指の先ほどの大きさで、しかもアダムの左手の入れ墨と同じような色合いをしているため、遠目にはまったくわからない。
原作でも、アダムが神造兵器を持っていることに気づく者はほとんどいなかった。闘技場の運営側も、彼が神造兵器持ちだということは知らずに使っているはずだ。
とはいえ、アダムがベアウルフを倒せたのは、神造兵器の力だけじゃない。
迫りくるベアウルフを前にして一歩も引かず、冷静に締め技を仕掛けられたのは、本人の胆力あってこそ。
もしおれが同じ神造兵器を手にしていたとしても、あんな風には戦えない。絶対に無理！

彼の揺るぎない精神力があるからこそ、これまでの十一戦すべてを勝ち抜くことができたのだろう。
おれは再び、闘技場へ視線を戻す。
どうやらアダムは、このまま連戦になるらしい。休む間もなく、次の魔獣が舞台の向かい側から連れてこられていた。
けれど、彼はそれに対して文句一つ言うことなく、自身が殺したベアウルフの亡骸をじっと見つめていた。そして、ゆっくりと目を閉じる。
どうやら、ベアウルフに黙祷を捧げているらしかった。
「……」
その静謐な横顔から、アダムの実直さがひしひしと伝わってくる。
思わず見入っていると、彼はそっと目を開け、ゆっくりと首を巡らせた。
そして、こちらを見る。
おれは思わず息を呑んだ。
えっ？　こ……こっちを見てる？
い、いや、まさかな。
闘技場からこの皇族専用の観覧席は見えなくはないけれど、それにしたって距離がある。おれの顔が見えるはずがない。
それなのに——どういうわけか、アダムはじっとこちらに顔を向けたまま、視線を逸らす気配す

らない。
その眼差しを受け、おれは胸の奥がぎゅっと重くなった。
――だって、おれは知っている。
この先、彼に待ち受ける運命を。
剣闘士アダムは、そう遠くない未来――四天王ローズの手によって、革命軍と殺し合いをさせられることになるのだ。
けれど、今のおれには、ただ見ていることしかできない。
おれは原作の展開を変えようなんて思っていない。ただ、自分とヴィクター、ゼノンの三人で国外脱出したいだけなのだから。
――剣闘士アダムはその後の戦いも難なく勝ち進んだ。
しかも彼は、対戦相手が人間だった場合は、とどめを刺すことなく勝利をおさめたのだ。アダムのおかげで、今日闘技場で命を落とした者は誰一人としていなかった。
その結果に、おれは思わずほっと胸を撫で下ろした。
だが、観客たちの反応は二分した。敗者にとどめを刺せと怒鳴る者と、徒手(としゅ)で勝ち抜き、かつ無駄な殺しをしないアダムの冷静な戦いぶりに喝采(かっさい)を送る者だ。
それは、おれのいる皇族専用の観覧席でも同じだった。
「こんなに強い剣闘士がいるとは思いませんでした」
「一度、あいつと手合わせしてみてぇな」

両隣のヴィクターとゼノンは、どうやら今回の試合を存分に楽しんだようだ。
二人とも、珍しく素直にアダムの力量を称えている。やっぱりアダムの実力は本物なのだろう。
双子と同様、皇帝陛下とリリア嬢もアダムに対して好意的な反応を見せていた。
「あ、あの剣闘士、本当にすごいなぁ……！」
「ええ、本当に。でも、どうしてあんなに強い方が、剣闘士などに身をやつしているのでしょうか？」
とりわけ皇帝陛下は、年頃の少年らしく頬をうっすらと染め、瞳をきらきらと輝かせていた。どうやら、すっかりアダムのファンになったらしい。
対照的に、ブラッドリー大臣やローズ、ライオネルは今日の試合結果にご不満な様子。
「ふむ……今回は少し期待外れでしたなぁ」
「ほんとそれ～。今日は人が死ぬところがいっぱい見られると思ったのにぃ！　それに男ばっかで、可愛い女の子が一人も出てこないんだもん！」
「あのアダムという剣闘士……敗者にとどめを刺さぬとは、武人としての覚悟が足りませぬな」
三人が口々に不満を言うのを聞いて、リリア嬢はわずかに眉をひそめていた。それに気づいた皇帝陛下が、首を傾げて小さな声で問いかける。
「リ、リリア……なにかあった？」
リリア嬢はすぐさま表情を和らげ、花の綻(ほころ)ぶような可憐な微笑を浮かべた。
「いいえ、なんでもありませんわ。それにしてもあのアダムという剣闘士は実に見事でしたわね」

「そ、そう？　うん……リリアが楽しめたなら、よかったよ」
仲睦まじいお二人の様子にほっこりしていると、双子が声をかけてきた。
「今日の試合はすべて終わりましたし、そろそろ帰りましょうか」
「シキ様、他にどっか寄りたいところあるか？」
「いや、大丈夫だ。まっすぐ皇城へ戻ろう」
双子とともに立ち上がると、大臣たちもほぼ同時に席を立った。どうやらみんな、このまま皇城へ戻るようだ。
ただ、どうしたわけか皇帝陛下とリリア嬢だけは席に座ったままだった。
「私と陛下はもう少しこちらにおりますわ。どうやら、陛下が会場の熱気にあてられてしまったようで……」
「す、少し休めば大丈夫だ。み、みんなは先に戻っててよいぞ」
見ると、確かに皇帝陛下の頬はほんのりと赤い。
しかしこれは……体調を崩したというわけではなさそうだ。たぶん、陛下的にはもう少しリリア嬢と一緒にいたいんじゃないだろうか。できれば二人きりで。
大臣も、陛下の気持ちを察したのだろう。見るからに機嫌のよさそうな笑みを浮かべ、猫撫で声で応じた。
「ふむ、わかりました。若い二人の語らいを邪魔してはいけませんからなぁ。しかしリリア、くれぐれも陛下に粗相のないようにな」

「わかっていますわ、お父様」
傍目から見れば、理解のある父親と一人娘のなごやかな会話だ。
しかしその実態は、この国の実権を掌握するラスボスと、そんな父親を裏切って革命軍に与し、密かに諜報活動を続ける少女という、決して笑えない構図である。
おれはそんな彼らのやりとりに顔が引きつりそうになりながらも、皇城へ帰るべく歩き出した。
行きに通った専用通路を、今度は逆方向に進む。おれたち一行の前後には、衛兵たちが警護としてついている。後方には、大臣、ローズ、そしてライオネルの姿もあった。
先頭の衛兵たちが扉を開け、闘技場の外へと足を踏み出した、その時だった。
異変は、音もなく訪れた。
「ぐあぁッ!?」
突然、衛兵たちに向けて大量の矢が一斉に降り注いだ。矢を受けた者たちはたまらず地面に崩れ落ち、うめき声を上げる。
「っ、シキ様！」
その場で硬直していたおれの身体を、ヴィクターが素早く抱き寄せた。
直後、先ほどまでおれが立っていた場所に矢が突き刺さる。地面に打ち込まれたそれは、一本でも致命傷になりかねない鋭さだった。
ほぼ同時に、ゼノンが抜刀する音が響く。
腰に佩いたサーベルを引き抜いた彼は、その刃を閃かせながら、降り注ぐ矢の雨を次々と斬り

払っていく。
「シキ様、怪我は!?」
「おれは大丈夫だ。ヴィクター、お前は？」
「私も問題ありません」
二人からの報告に、胸を撫で下ろす。
しかし、安心したのも束の間だった。
見ると、周囲はすでに戦場と化していた。革命軍の兵士たちが、通用門の周囲を何重にも取り囲み、皇国軍の衛兵たちと激しく斬り結んでいる。
いつの間にこれだけの兵力を集結させていたのか――そう思う間もなく、怒号と金属のぶつかる音が次々と響き渡る。
「か、革命軍だ！　ブラッドリー大臣殿をお守りしろ！」
「陛下にも危険が及んでいるかもしれん、急げ！」
「くそ、増援を――ぐあァッ!?」
また一人、皇国軍の兵が崩れ落ちる。
突然の奇襲により、皇国軍の兵士たちは完全に後手に回っていた。
革命軍は綿密な準備をしていたようで、塀の上や建物の屋根に上り、弓矢やボーガン、スリングを使って衛兵たちを狙い撃ちにしている。状況は明らかにこちらが劣勢だった。
目の前で人が倒れていく光景に、恐怖で心臓がばくばくと脈打つ。思わず、おれを抱きとめてい

るヴィクターの服をぎゅっと掴んでしまう。
すると、彼がおれをなだめるように優しく声をかけてきた。
「シキ様、大丈夫ですよ。今は皇国軍が劣勢のようですが、闘技場の中に戻れば……おや？」
「おい、扉が閉まってねぇか？」
振り返ると、闘技場の扉がいつの間にか閉じられていた。数人の衛兵たちが懸命に押したり、扉の向こうへ向かって大声を上げたりしているが、うんともすんとも言わない。
どうやら中から閂（かんぬき）を下ろされてしまったらしい。
おれはヴィクターの腕を離れ、扉の前にいるブラッドリー大臣とローズ、ライオネルの三人のもとへ向かった。
「大臣、どういうことだ？　中に戻らないのか？」
「そうしたいのはやまやまなのですがねぇ……ライオネル将軍が」
大臣が、隣のライオネルに呆れたような目を向ける。
すると当の本人は、まるで自慢でもするかのように胸を張って言い放った。
「扉を開けたままでは、革命軍に侵入される恐れがありますからな。皇帝陛下とリリア嬢の身になにかあってはなりませぬ。ゆえに、私の判断で兵に命じて扉を閉じさせた次第です」
……なにやってんのコイツ!?
いや、言いたいことはわかる。言いたいことはわかるけどさあ！
扉を閉めるにしても、おれたちが中に戻ってからでよかっただろ!?

「ラ、ライオネル……おれたちが中に戻ってから扉を閉めるんじゃダメだったのか？」
「愚かなことを。反逆の徒どもが群れをなして押し寄せてきたのですぞ。我ら四天王が、戦わずして退くなど許されることではございませぬ」
「大臣は四天王じゃないだろう」
「同じこと。皇国の盾たる我らが敵に背を向けるなど、万に一つもあってはなりませぬ！」
「……」
あ、頭が痛くなってきた。
でも、そういえば確かに漫画でもライオネルってこういう性格だったな～。
真面目すぎて融通がきかないというか、猪突猛進タイプというか……
なるほどな、シキとライオネルの仲が悪かったはずだよ。
この二人、絶対にそりが合わない。想像するまでもなく明らかだ。
しかも、そんなライオネルに対して、大臣もローズもツッコミ一つ入れやしない。
二人とも肩をすくめて、いつものことだと言わんばかりに乾いた笑みを浮かべるのみだ。
「ライオネル将軍は真面目な方ですからなぁ……色々な意味で」
「ライオネルちゃん、ほんっと相変わらずだよねぇ～。まっすぐすぎるっていうか、馬鹿真面目っていうかさぁ……」
どうやら二人は、ライオネルのことはとっくに諦めているらしい。
大臣でさえライオネルの手綱を握るのは難しいようだ。唖然としていると、苦笑いを浮かべた

ヴィクターが声をかけてきた。
「シキ様、それでは私とゼノンは行ってきます。どうやら衛兵たちだけでは荷が重すぎるようですから」
気を取り直して、ヴィクターの言葉に頷いた。
「わかった。お前たちなら大丈夫だとは思うが、無茶はするなよ」
「それをシキ様が言いますか？　いつも無茶ばかりするのは、あなたでしょうに」
ヴィクターは悪戯っぽく笑うと、恭しい手つきでおれの右手を取った。そのまま手の甲にそっと口づけを落とす。
こ、こんな時になにをやってるんだ、こいつは！
思わずツッコミを入れかけたその時、背後から鼻で笑うような声が聞こえた。ライオネルだ。
「シキ将軍は、今日も革命軍の相手を部下に任せ、ご自身は後方でぬくぬくと構えておられるおつもりですかな？　それが四天王のなさりようですかな」
こいつ、まだおれに突っかかってくるのかよ！
っていうか、そんなこと言ってる暇があるなら、お前もさっさと戦いに行けって！
だいたい、そんな風に煽られてもなんとも思わないぞ。
なにせおれは、四天王のプライドなんて最初から持ち合わせていないからな！
「もちろん、おれは後方で待機しているさ。おれみたいな足手まといが前に出たところで、かえって部下の仕事を増やすだけだからな」

「なっ……!?」
ライオネルが、目を見開いて固まった。
えっ、なに？　なんか予想以上に驚かれてるんだけど？
どうしたのかと思ったら、驚いているのはライオネルだけではなかった。
大臣とローズも、あんぐりと口を開けておれを見つめている。
「これは驚きですねぇ……まさかシキ将軍がそんなことをおっしゃるとは。そもそもライオネル将軍に返事をなさる日が来るなんて、夢にも思いませんでしたよ」
「ほんとビックリ！　シキちゃん、どうしちゃったの？　風邪でもひいた？」
えっ、そこ驚くところなの!?
っていうかシキって、ライオネルのこと、いつもガン無視なの？
それは同僚に対してどうなんだよ……四天王ってハラスメント防止規則とか存在しないの？
でももう答えちゃったものはしょうがない。
見ると、ライオネルは呆然とし、まるで時が止まったかのように立ち尽くしていた。おれが返事をしたという事実が、それだけ衝撃だったらしい。
どうしたものかと思っていたら、そんなライオネルに向かって双子が口を開いた。
「ライオネル将軍。うちのシキ様にあれだけおっしゃったんです。まさか将軍ご自身は、このまま後方に残るつもりじゃないでしょうね？」
「シキ様にあれだけ偉そうに言っておいて、自分だけ安全圏に残るってことはないよなぁ？」

「……あ、ああ。もちろんだ。貴殿らに言われるまでもない！」
ようやく我に返ったらしいライオネルは、ばつが悪そうにおれから目を逸らすと、背負っていたバトルアックスを抜きながら歩き出した。
そのあとを、ヴィクターとゼノンが続く。
その背中を見送って、おれは心の底から安堵の息を吐いた。
双子が絶妙に話題を逸らしてくれたおかげで、ライオネルが戦線へ向かうことになって本当に助かった。
帰ったら、二人にはお礼を言っておこう。
気を取り直し、今度は後ろにいた大臣とローズに向き直る。
そして、原作のシキっぽく、無表情を装って少しだけ偉そうな声色を作った。
「さて……ライオネルと、俺の部下は戦場へ向かったぞ。ローズ、お前は行かなくていいのか？」
「ここで大臣とシキちゃんを守る人も必要でしょ～？　それに、あの三人が行ったならローズの出番なんてないと思うし！」
「……そうか」
ひらひらと片手を振って答えるローズ。
意外と真っ当な答えが返ってきたな、と考えていたのも束の間。その直後、彼女はふと真顔になり、なにかを測るような視線でこちらをじっと見つめてきた。
「それにしてもさぁ、最近のシキちゃんって、なんか雰囲気変わったよね？」

ぎくっ！

「そ、そうか？」

「そうだよ！　ブラッドリー大臣だってそう思うでしょ？」

「ふむ、確かに。以前のシキ将軍なら、ライオネル将軍に返事をなさるなんて考えられません。完全に無視しておられましたからな。それにゼノンとヴィクターの二人とも、ずいぶんと距離が近くなったように見えますなぁ」

ボロ、めっちゃ出てる～！

元のシキらしく、冷酷で偉そうに振る舞っているはずなのに、どこでどうバレてるんだよ……!?

どうしよう、なんて言って誤魔化せばいいんだ!?

「そもそも、今日シキ将軍が闘技場に来られたのも驚きましたよ。いつもは私がどんなに誘っても、こういう集まりには絶対顔を出さなかったのに。どういう風の吹きまわしですかねぇ？」

「そうそう！　シキちゃん、こういうの絶対来ないじゃーん！」

えっ、そうなの!?

いや、おれ、今日大臣に誘われたから来たんだけど!?

まさかの――職場の上司に誘われて集まりに参加したら、上司と同僚に「なんで来たの？」って言われた件について。ブラック企業すぎない？

ただ……よくよく考えると、確かに元のシキは、誘われたところでこういう集まりに参加するタイプじゃないな。

立ち読みサンプルはここまで

ヴィクターとゼノンも、そこは先に突っ込んでくれよ！

というかシキ……お前、同僚に話しかけられてもガン無視で、上司からのお誘いにも絶対参加しないってどうなんだ、それ。

世の中の社会人が聞いたら、全力でしばかれるぞ！

まあ、シキはキャンディケインっていう神造兵器を扱える唯一無二の人間だから、そんな横暴な振る舞いも許されていたのだろうけれど。それにしたってだよ。

「べつに、どちらも特に理由はない。気が向いただけだ」

「気が向いた、ですか……」

「ふーん？」

とりあえずもっともらしく答えてみたものの、大臣もローズもあまり納得していないようだ。おれたちの間に、なんとも形容しがたい空気が流れる。

その時、少し離れた場所から、耳をつんざくような男の悲鳴が響いた。

あまりに苦悶に満ちたその声に、三人とも反射的にそちらへ視線を向ける。

「――な、なんだコイツ!?　まさか神造兵器持ちか!?」

「こ、皇国軍にこんな奴がいるなんて……ぎゃあああっ!?」

白刃が閃くたびに、男たちが痛ましい悲鳴を上げてばたばたと倒れていく。その中心にいたのは、ヴィクターだった。

腰に佩いていた刀を右手に握り、ヴィクターは軽やかに兵士たちの間を駆ける。斬られた者は泡